

今の僕には関係ない

「あほらしい。」と京太は笑った。
 「大学行くだけが能やないよ。」と京太は続けた。

「本当は、僕も、六年の時なあ、
 兄ちゃんと一緒に行きたかったなあ、
 あの大学受験の為の予備校みたいな学校へ。
 行きたいと泣いたなあ。
 けど、今はそう思わんわ。」
 と京太は打ち明けた。

「よう、考えてみいや、ねえ、兄ちゃん。
 今が僕らの青春やで。」

大人になったら、嫌な仕事を毎日して
 お金をかせぎ、暮らさな、あかん。
 お父ちゃんや、お母ちゃんを見てみい。
 仕事して楽しんでるか。

絶対、楽しんでない。
 そんなのいやや、今が大切や。」
 と、京太は、ぼそぼそと途切れ途切れ言った。

僕は黙っていて、それ以上、反論できなかった。

今日は、それでも一日のんびりした日だった。
 外は、良く晴れていて、絵でも書こうと、
 宇治川沿いに行ったが、風は非常に強い。
 暗くなるまで、宇治川の土手を散歩した。

八時すぎ、夕食を取って、早く寝た。

